

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 優秀賞(事務次官賞)

「もしものときの助け合い」

鹿児島県 大和村立名音小学校 4年 上野 百葉

「えっ、どうして家に帰れないの。」

6月20日火曜日、わたしは母と弟と学校から家に帰ることができなくなり、学校にとまることになってしまいました。

わたしは、小さいころから新体操を習っています。大会が近くなり、団体の選手に選ばれたいという思いが高くなっていていたころでした。そのために、毎週火曜日に体育館で自主練習に取り組んでいました。この日は、授業中からザーザーふる雨の強い音には気づいていましたが、わたしは練習に夢中で、雨のこともすっかり忘れていました。

実はこの日、わたしが住む奄美大島周辺は、線じょうこう水帯が発生し、大雨が長時間ふり続いていたので。そのせいで、家に帰る道がかん水して通行止めになってしまいました。だから、わたしと母と弟は、家に帰ることができなくなったのです。

初めてのことで、どうなるのか不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、学校の近くに住んでいる教頭先生もいっしょに泊まってくれることになりました。わたしの不安な気持ちは少し小さくなりました。

しばらく学校ですごしていると、おなかですいてきました。学校にあったおかしや母が持っていたアメなどを食べていましたが、なかなかおなかいっぱいにはなりません。そのとき、大雨の中、校長先生がカップめんとおにぎりを持ってきてくださいました。

「校長室のテレビを見ながら、ゆっくりすごしていいよ。」

とおっしゃいました。わたしは、うれしくなり、校長室ですごすことを考えると少しわくわくしてきました。校長室で、教頭先生と母と弟とわたしの4人でごはんをおなかいっぱい食べたり、ニュースやサッカーの試合を見たりしてすごしました。大雨や道路のかん水のことなどすっかり忘れてしまうほどでした。

ねる時間がきました。外の雨のいきおいはおさまらず、大きな雷もゴロゴロなっていました。さっきまで楽しかった気持ちが小さくなり、また、不安な気持ちになりました。学校に備えてあったマットと、母の車につんでいたバスタオルでねることになりました。ちゃんとねむれるか心配になりましたが、教頭先生や母と弟もいっしょだったので、少し気持ちが落ち着きました。バスタオルではうすくて寒かったけれど、しょうがないと思いながら何とかねることができました。

「百葉、起きて。帰るよ。」

次の朝、5時に母がわたしと弟を起こしました。雨や雷が少しおさまり、道路のかん水もなんとか車が通れるほどになって、ようやく家に帰ることができました。わたしは、心から安心しました。

今回の大雨で、となりの小学校へ向かう道路が土砂くずれで通れなくなりました。近くの宇検村では、家に水が入ってきたり何か所も土砂くずれがおきたりしたそうです。その後何日も多くの人が災害で大変な思いをしていることを知りました。わたしが学校で不安な夜をすごしていたとき、たくさんの方が同じような思いをしていたのだと気づきました。

わたしは、初めての経験でとても大変な思いをしました。でも、学んだこともたくさんありました。それは、思いもしない災害に出会った時は、早めのひなんが命を守るために大切だということ。日ごろから、もしものときの備えが大事だということ。そして、何よりいっしょに泊まってくれた教頭先生や、大雨の中夕食を準備してくれた校長先生のように、もしもの時はお互いに助け合うことが大切だということです。これからも、いろいろな災害にあうかもしれません。もしものときのために、自分の命を守る行動を考えたり、自分にできる備えをしたりしたいと思います。そして、どんな時も困ったときはお互いに助け合うやさしい心を持ちたいです。